

保育者養成課程におけるメディアとしての紙芝居 —コミュニケーション能力育成の可能性—

髻 櫛 久美子

1. はじめに

今日のスタイルの紙芝居、すなわち平絵紙芝居が、教育メディアとして有用なものであることは紙芝居の歴史から明らかである。1930年に平絵紙芝居が誕生し、街頭で子どもたちの娯楽として瞬く間に流行した。その感化力の強さや教育力の強さに注目した今井よねにより福音紙芝居として活用され、手書き一点物の街頭紙芝居は、印刷紙芝居となり教育的な効果を発揮した。今井の活動に影響を受けた松永健哉は、校外学習に紙芝居を活用普及させ、教育紙芝居運動を展開した。戦時下には、松永らの運動は国策と結び付き、戦意高揚のメディアとしての活用を推進した。日本紙芝居教育協会が開設され、『教育紙芝居』『紙芝居』という冊子を刊行し、紙芝居の研究・活用が国を挙げての政策として行われた。このような、紙芝居の活用の拡大は、紙芝居の教育メディアとしての有用性を物語っている。

保育者養成課程に、紙芝居を教育メディアとして導入する目的としては、大きく2点が考えられる。1つは、保育実践現場で活用するための知識、技術・技能の修得という観点である。もう1つは、社会に求められる資質、あるいは保育者として求められる資質を獲得するために教育メディアとして活用するという観点である。もちろん、この2つは重なり合い関連していることは言うまでもない。

2013年に、「教育メディアとしての紙芝居—保育者養成課程における取り組み—」¹に、保育者養成課程で紙芝居を教育メディアとして活用することの意義、方法に関して検討し報告した。ここでは、保育実践に活用するための知識、技術・技能の学修について考察した。本稿では、残された課題、社会に求められる資質、あるいは保育者として求められる資質の獲得に関して、紙芝居を教育メディアとして活用する可能性を探ってみた。

社会に求められる資質の中でも、コミュニケーション能力に焦点を当てたい。まずは、コミュニケーション能力が教育されなければならない能力として注目され、主張されている現状とその背景について考察する。そして、次に、求められているコミュニケーション能力とは、どのような能力なのかを検討する。そのうえで、コミュニケーション能力育成に紙芝居をメディアとして活用する可能性について、これまでの養成課程での事例から検討することとする。

2. 社会に求められる資質としてのコミュニケーション能力

今日の日本社会において、コミュニケーション能力、あるいは、コミュニケーション力の重要性が盛んに叫ばれている。確かに、授業中、学生に質問をすると、言葉が非常に短く単語しか返ってこない。このようなことが気になりだしたのは何時頃からだろうか。「それがどうしたの」「もう少し、詳しく説明してみても」と促しても、なかなか文章にならない。このような状況を「一言主(ひとことぬし)」²が増えたと、文化人類学者であり作家の上橋菜穂子氏が述べているが、いい得て妙だと思った。一言しか言わないのは、面倒だからなのかそれとも表現することが不得手だからなのか。コミュニケーション能力の問題と重ねて考えられるのではないだろうか。

2-1. 大学生とコミュニケーション能力

経団連実施の「新卒採用に関するアンケート調査」結果によれば、選考時に重視する要素を25項目から5つ解答する設問では、「コミュニケーション能力」が12年連続で第1位である³。

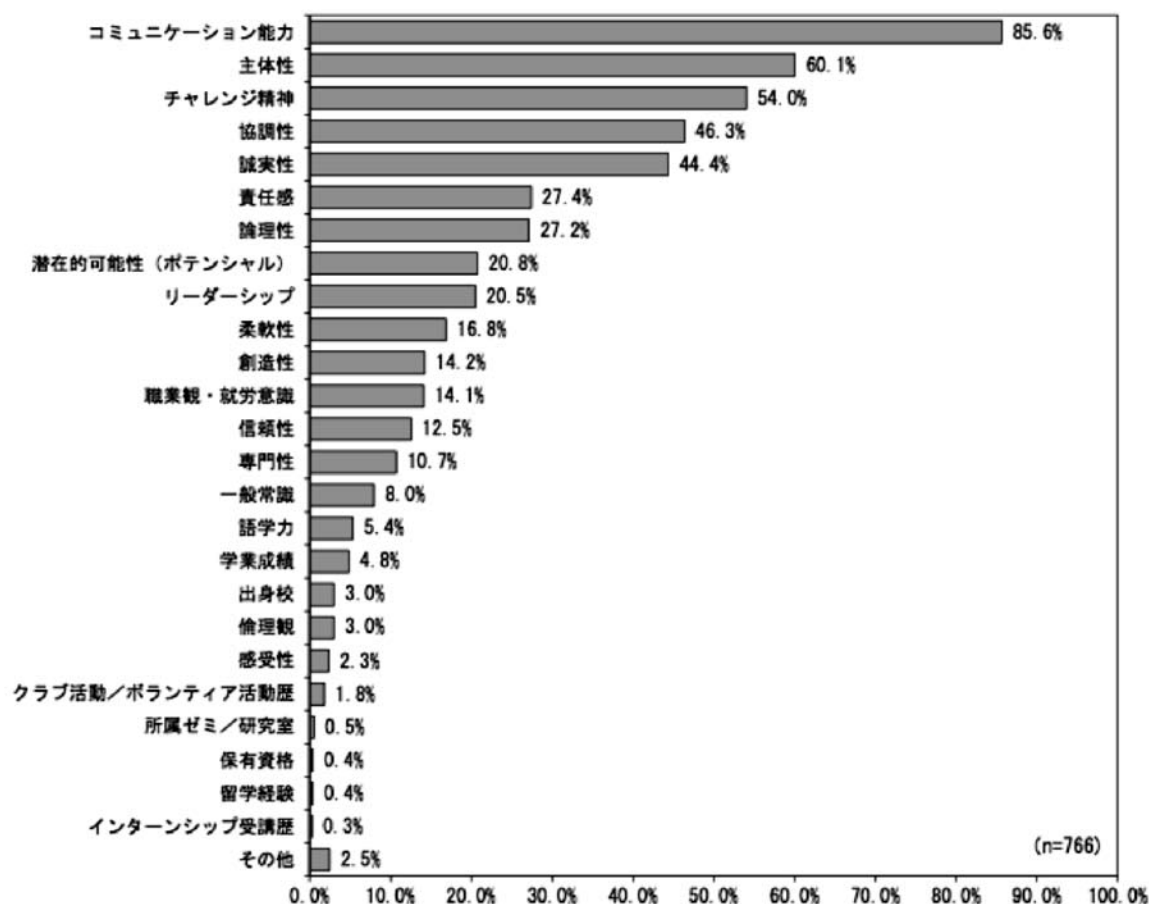


図 1. 企業が新卒者を採用する際に重視する能力
(出典:「新卒採用 (2015 年 4 月入社対象) に関するアンケート調査結果」)

図 1 に見られるように、「コミュニケーション能力」が85.6%、次いで「主体性」60.1%、「チャレンジ精神」が54.0%、「協調性」が46.3%という順になっている。それに対し、「専門性」は10.7%、「学業成績」は4.8%となっており、経済界は、専門課程の深い知識や学業成績以上に、コミュニケーション能力を採用選考の重要な点として考えてきたといえる。

厚生労働省もコミュニケーション能力を就職基礎能力⁴の1つとしてあげ、習得の目安として、1. 意志疎通（自己主張と傾聴のバランスを取りながら、効果的に意思疎通ができる。）2. 協調性（双方の主張の調整を図り、調和を保つことができる。）3. 自己表現能力（状況にあった訴求力のあるプレゼンテーションを行うことができる。）

の3点を挙げている。

一方、大学生の現状はどのように捉えられているだろうか。2014年12月に公表された学生支援機構による学生支援の取り組み状況の調査の結果では、学生の抱える課題に対して支援している内容としては、「対人関係、心理・性格の相談」が81.0%で最も高かったとのことである⁵。このような調査からも、高等教育機関に学ぶ学生にコミュニケーション能力が不足し、社会に出るまでに身につけてほしいとの要請があることにうなずける。

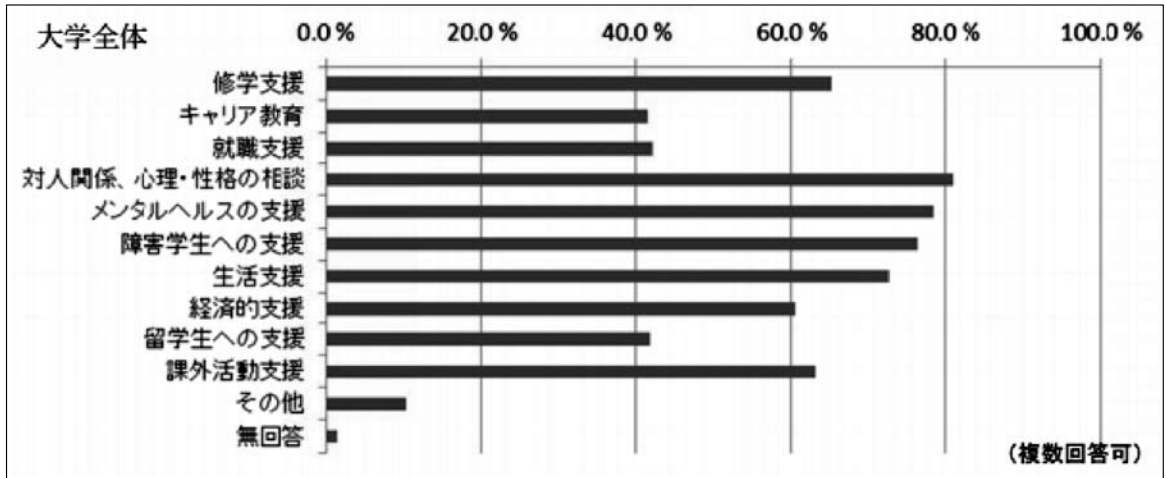


図2. 学生の抱える課題に対する支援内容
(出典：「大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査（平成 25 年度）」)

2-2. 幼児期、初等教育期、中等教育期の子どもとコミュニケーション能力

コミュニケーション能力は、大学生だけではなく、幼児期、初等教育期、中等教育期の子どもに対しても求められている。現行の学習指導要領改訂の基本的な考え方として出された中央審議会の答申⁶には、児童、生徒の言語活動の充実が必要であるとされている。学習指導要領では、言語を知的活動（論理や思考）だけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤として捉え、言語活動を充実することによって、コミュニケーションに関する能力や感性を育んだり、情緒を養ったりすることが期待されているのである。

2010年5月には、文部科学副大臣の主催による「コミュニケーション推進会議」が設置され、子どもたちのコミュニケーション能力の育成を図るための具体的な方策や、普及のあり方についての議論が重ねられた。その経過報告として、2011年に「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取り組み～」⁷が出されている。

幼児期の子どもの現状はどのように捉えられているのだろうか。文科省が子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性を打ち出すにあたって、近年の子どもの育ちが変化しているとして、幼児教育の今日的課題として挙げているのは次の6点である。ここにも、コミュニケー

ション能力の不足という言葉が認められる⁸。

- ①基本的な生活習慣の欠如
- ②学びに対する意欲・関心の低下
- ③自制心や規範意識の不足
- ④運動能力の低下
- ⑤コミュニケーション能力の不足
- ⑥小学校生活への不適応

さらには、OECDでも、子どもたちに必要な能力は「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」であるといわれており、コミュニケーション能力の育成は、日本だけの問題でないことがうかがえる。

日々授業をしながら一言主が増えたと感じたり、学生の語彙の少なさが気になったり、また人と関わるのが不得手になっているのではないかと感じてきたことは、幼児期の子どもから大学生に至るまでの子どもたちの「コミュニケーション能力」の不足として、日本はもちろんのこと、世界規模で社会的な問題となっているといっていよう。

3. コミュニケーション能力が問題視される背景

上述のように、コミュニケーション能力は、今日の日本の社会において過剰ではないかと思われるほどあらゆる階層において問題視されている。なぜなのだろうか。

グローバル社会を生き抜くために必要とされる能力を「21世紀型スキル」⁹と名付け、欧米を始め、韓国、中国、インドなどの世界各国が能力育成に取り組み始めている。「21世紀型スキル」は、批判的思考力、コミュニケーション能力、コラボレーション（チームワーク）能力、自律的に学習する力等が含まれた4カテゴリー10項目から定義されている。ここでも、コミュニケーション能力が挙げられているのである。日本では、「21世紀型スキル」に関しては、文部科学省が中央審議会「生きる力」という言葉を用いて、21世紀社会を主体的、積極的に生き抜く力を育てていくことの重要性を打ち出している。

「コミュニケーション推進会議」の説明は、コミュニケーション能力が必要とされていることを簡潔に述べているように思われる。要約すると次のようになる。

グローバル化が進む現代社会にあって、国際社会の一員として多様な価値観を持つ人々とともに協働しながら社会に貢献することが求められ、異文化コミュニケーション能力、異世代間コミュニケーション能力が必要とされている。しかし、学校生活の中では、いじめやキレるという問題が生じ、子どもの自殺者も問題となっているのが現状である。その原因としてあげられるのは、社会の変化とそれに伴う子どもの活動の変容である。インターネットを通じたコミュニケーションが子どもたちにも普及し、屋外での遊びや自然と触れ合う機会が減少し、身体性や身体感覚が乏しくなっていることが他者との関係づくりに負の影響を及ぼしているといわれている¹⁰。

大学教育とコミュニケーション能力育成に関しては、「ジェネリック・スキル」がキーワードとなる。この言葉が用いられるようになった背景も、現代社会がグローバル化したことによるものであると説明されている。高等教育にはグローバル化した「知識基盤社会」において、活躍する人材を育成することが求められており、専門的な知識習得とともに、社会人として活躍できる能力すなわち「ジェネリック・スキル（汎用的な能力）」を学生に身に着けさせることが課題となっている。このような能力は、「学士力」や「社会人基礎力」とも表現される。「ジェネリック・スキル」は、

社会でどのような仕事についても必要な力のことであり、学問分野固有のコンピテンスでもなければ、職業固有のコンピテンスでもない。このジェネリック・スキルのひとつとしてコミュニケーション能力が挙げられているのである。

一方で、この考え方に対する汎用性の問い直しも主張されている。領域固有性を考慮したうえで、それぞれの領域において求められる能力の抽象度を上げたときに共通している部分を「ジェネリック・スキル」というべきだと松下佳代は主張している¹¹。

4. コミュニケーション能力とは何か

先に述べた、企業が学生を採用するにあたって、コミュニケーション能力を最も重視していることが、2003年4月入社の新卒者から12年間連続していることを考えると、社会に出てもコミュニケーション能力が不足しており、高等教育機関においてコミュニケーション能力を育成することが要請されているということになる。「コミュニケーション能力」とは何か。就学前の子どもにいわれるもの、学校教育の場でいわれるものと、企業が新卒者に求める「コミュニケーション能力」が同じなのだろうか。

齊藤孝は、著書『コミュニケーション力』で、「コミュニケーションとは、意味や感情をやりとりする行為」¹²であり、「情報を伝達だけでなく、感情を伝え分かち合うこともまたコミュニケーションの重要な役割である」と述べている。確かに、情報伝達だけなら一方通行で完了する。感情を伝え分かち合うという共感的な理解が双方向でなされないために行き違いが生じ、コミュニケーション能力の欠如からトラブルが起き、人間関係が悪化するのだと説明がつく。子どもたちのいじめ問題も、相手の立場に立つことができないで、いじめられている者の痛みや悩みを感じることなく、暴力がエスカレートして深刻ないじめへと発展し、結果として行き過ぎた暴力による殺害、あるいは自殺に至る場合もある。

中央教育審議会平成20年1月17日答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、言語は知的活動（論理や思考）だけではなく、コミュニケー

ションや感性・情緒の基盤でもあるとしており、斎藤の説明と一致している。

コミュニケーション推進会議(教育 WG)は、「コミュニケーション能力」の捉え方については様々あると考えられ、一様に定義できるものではないとしながらも、子どもたちをめぐる現状や課題、そして新しい学習指導要領の考え方などを踏まえて、「コミュニケーション能力を、いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互理解を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と捉えている。そして、学校でコミュニケーション能力を育成するには、以下の4点等の要素で構成された機会や活動の場を学校教育の中に意図的、計画的に設定する必要があるといっている¹³。

- ①自分とは異なる他者を認識し、理解すること
- ②他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること
- ③集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと
- ④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと

では、高等教育機関でいうところの、ジェネリック・スキルの1つとされる、コミュニケーション能力とは何を意味するのか。

神戸大学の川嶋は、ロンドン大学の Barnett の図を用いて「ジェネリック・スキル」を、大学で育成するコンピテンスの一つとして説明している¹⁴。「アカデミックな力と社会的(労働世界)な力」と「特定の分野に限定して必要な力と一般的に必要な力」の2つ軸により、4つの分野に区切って整理したものである。4つのマトリックスのうちジェネリック・スキルは一般的で社会的なコンピテンスということになる。(図3参照)

このスキルを育成するその方法に関しては、新たな科目を作るのではなく、カリキュラムの中に埋め込んで育成することが大切だと述べている。教員が協働して、各教科の中にマッピングし、到達目標を学生に示すことが重要だと述べている。

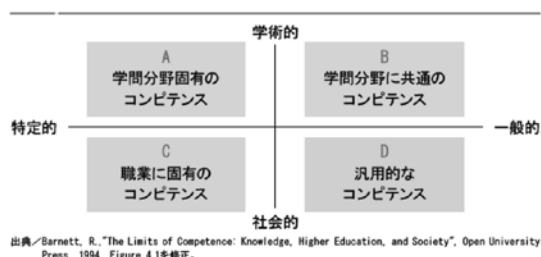


図3. 大学で育成するコンピテンス

岡田敬司は、『コミュニケーションと人間形成』において、「コミュニケーションが重要になるのは、何人も人間形成の場に限ったことではなく、会社や役所でも同じことである」としながらも、「会社や役所のコミュニケーションは組織の目的(仕事)を達成するための道具だといっても誤りではない」と述べている。しかし、道具的コミュニケーションに片寄ると、組織がぎくしゃくしてくるので、人間関係の潤滑油的なコミュニケーションも必要であるといっている。教育の場では、「知識や技術の伝達や獲得、協同生活の習得等を『仕事』としている」と考えれば、この仕事を達成するための道具としてのコミュニケーションも必要であるが、家庭や学校のコミュニケーションは必ず、「人間理解」を伴っていなければならないと述べている¹⁵。岡田の分類からいえば、ジェネリック・スキルとしてのコミュニケーション能力は、道具的コミュニケーションではない「人間理解」を伴うコミュニケーションということになるのだろう。

斎藤、岡田、「コミュニケーション推進会議」、川嶋のいうコミュニケーション能力は、人々が人と関わり生きていくための力とでもいってよいものだと考える。

5. コミュニケーション能力の育成

繰り返しになるが、「コミュニケーション推進会議」が学校でコミュニケーション能力を育成する方法としている『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取り組みは、以下の4点等の要素で構成された機会や活動の場を学校教育の中に意図的、計画的に設定する必要があるといっている。

- ①自分とは異なる他者を認識し、理解すること
- ②他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考

すること

- ③集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと
- ④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと

ここに挙げられている要素は、厚生労働省が就職基礎能力のうちのコミュニケーション能力の説明として述べている以下の3点と、かなり類似性が高いといつてよいのではないだろうか。もう一度比較してみたい。

- 1. 意志疎通（自己主張と傾聴のバランスを取りながら、効果的に意思疎通ができる。）
- 2. 協調性（双方の主張の調整を図り、調和を保つことができる。）
- 3. 自己表現能力（状況にあった訴求力のあるプレゼンテーションを行うことができる。）

それぞれの成長段階で、状況に応じて具体的な行為レベルで求められているものに違いはあるだろうが、かなりの共通性が認められ、発達段階に応じて順次身につけていくべき能力であると考ええる。つまり、新卒者に求められるコミュニケーション能力も、学校教育の場で問題となっているコミュニケーション能力も、発達段階や生活世界の違いによる差はあるものの、人間社会におけるまさしく汎用的能力と考えるべきものだといえるのではないだろうか。ジェネリック・スキル育成の議論にもあったように、コミュニケーション能力を育成するには、新たな科目を作るのではなく、教員が協働して、各教科の中にマッピングし、到達目標を学生に示すことによって育成することが必要である。具体的に、どのような教科でマッピングが可能になるか、本稿では「コミュニケーション推進会議」が提唱する『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取り組みをモデルに検討してみたい。文部科学省においては、平成22年度から、コミュニケーション能力の育成を図るため、芸術家等を学校へ派遣し、芸術表現体験活動を取り入れたワークショップ型の授業を展開する事業が実施されている。その取組の効果をアンケート調査からまとめているが、成果が上がっているといえるからである。

子どもたちには、以下の4つの効果が認められ

たとされている。

- ア) 他者認識、自己認識の力の向上（「受け入れる力」の向上）
- イ) 「伝える力」の向上
- ウ) 自己肯定感と自信の醸成
- エ) 学習環境の改善

教員への効果として、芸術家等の表現活動の専門家によるワークショップ型の授業は、教員にとって、通常の授業手法や評価方法を見直し、改善する機会となること、そして、学級の雰囲気の改善により、学級経営や学年経営が円滑に進む等が挙げられている。

子どもたちにとっての効果も、教員にとっての効果も、大学での教育でも成果を上げたい点だと考える。

6. 保育者養成課程での紙芝居を用いたコミュニケーション能力の育成方法

「コミュニケーション推進会議」は、「コミュニケーション能力の育成を図るため、芸術家等を学校へ派遣し、芸術表現体験活動を取り入れたワークショップ型の授業を展開」という方法を提唱している。紙芝居を創作し、演じることで芸術表現活動をし、第1人者といわれる演じ手の教育と実演（右手和子先生実演ライブ）¹⁶から演じ方を学ぶという方法を用いることで、保育者養成課程における、紙芝居を教育メディアとしたコミュニケーション能力の育成を検討してみることとする。

どのような教育内容が考えられるのか。ここでは、紙芝居活用に関して保育現場の保育者へのアンケート、保育者養成校の学生へのアンケートを実施してきたその研究¹⁷との関連から、以下のよう内容を挙げることにする。

- 1. 紙芝居を知識として学ぶ。
- 2. 紙芝居の演じ方を専門の演じ手を手本に学ぶ。その後実際に、既存の紙芝居を演じる。（表現能力、共感力の育成）
- 3. 紙芝居を作る。（創作活動を通して、自己認識の力を向上させ、絵と言葉による表現力を育成する。）
- 4. 自作紙芝居を演じる・他者の作品が演じられるのを観客として観る。（自己表現力、他者を受容することを学ぶ。）

5. 演じる空間の設営。(討議、協働の体験)
6. 実演会を実施する。(表現力、他者受容、自己肯定感、自信、協働する力を育成する。)

6-1. 紙芝居を知識として学ぶ

紙芝居の歴史や特性を知識として学習することは、上記2から6の活動を伴ったいわば能動的な学び(アクティブラーニング)に比べ、知識獲得型の受動的な学修である。活動型学修における経験が有効な経験となるためには、内的思考が活性化される必要がある。2以下の活動的学修を、反省的实践とするための、探究の基礎になるものとして設定する。

6-2. 紙芝居の演じ方を専門の演じ手を手本に学び、既存の紙芝居を演じる¹⁷。

1. ことばを声に出して表現することの意味を学ぶ。「せりふ」は言い方次第で登場人物の心の動きや状況を見る人に感じてもらうことができるように、「語り」はその場の情景・状況を伝えることができるように語ることがを学ぶ。
2. 声の使い方、すなわち、リズム、強弱、高低、速さ等を効果的に使い分け、表現を豊かにすることを学ぶ。
3. 間の取り方次第で、＜期待させる＞こと、＜余韻を残す＞ことができるということ、すなわち、ドラマを活かす間の取り方を学び実践する。
4. 絵に芝居をさせる方法として、画面の抜き方に、速さ、途中で止める、画面を動かす等の技術があることを知識として学ぶとともに、卓越した実践家の実演を通して学び、練習し、技能として身につける。

1～4を中心とした方法と内容で、演じ方を学び、繰り返し実演することは、声を用いた身体表現能力を身につけることになる。また、実演と観客の両方を体験することで、共感を繰り返し味わうことになる。

6-3. 紙芝居を手作りする

絵とシナリオによる紙芝居を手作りし、自己の内面表出をする。自分の表現したいものを想像し、絵と言葉により創造することで自己表現をするのである。

図4は、学生の制作した紙芝居「がんばるもん

ん」という作品である。子どものシャチが、お父さんシャチのようにうまく芸ができるようになりたくて一生懸命練習し、ついに観客から拍手がもらえるようになった物語である。作者の水族館でのシャチのトレーナーになりたいという思いを表出させた作品であり、この作品を制作することにより作者は、明確になりたい自分を自己認識することができ、実際に保育者を断念し水族館で働くことになった。

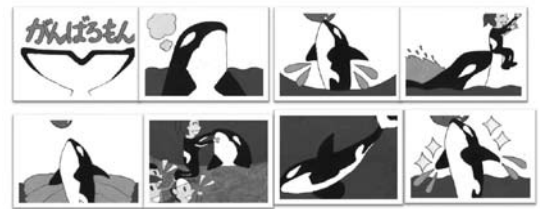


図4.「がんばるもん」

図5、「とべとべぼーる」は、保育所に就職することを希望した学生が乳幼児向けに作成した作品である。対象児の発達段階を考え、単純な絵と言葉から創作し、幼い子どもを引きつけるために、演じ方で学んだ「抜き」の効果(以下①～⑩のアンダーライン部分)を活かした作品となっている。観客の立場になって、共感できるように工夫したことは、他者理解となっていると考える。

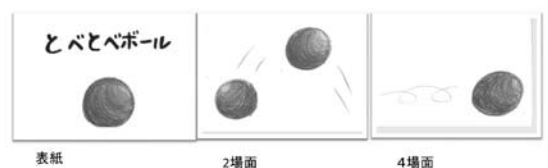


図5.「とべとべぼーる」

- ①ここに青いボールがあるね！
このボールはとってもふしぎなボールなんだよみててね
「とべとべボール」 ヒューン(線まで抜く)
- ②ヒューン/ほらね！とんだでしょ！このボールすごいよね！
- ③次は何をお願いしようかな！「転がれ転がれボール」ころころころ～
- ④わ！すごい！ころころころころ～

- ⑤ころころころがったね！次は何にしようかな！
 ⑥ムクムク・・・モコモコモコ・・・あれ？どうしたのかな・・・？びよーん！
 ⑦わー！のびちゃったね！長いよ！じゃあね！
 「小さくなれボール 小さくなれボール」
 ヒューン（ゆっくり抜く）
 ⑧わ！ちっちゃくなっちゃた！かわいいね！じゃあ次は！「大きくなれボール 大きくなれボール」（勢よく抜く）
 ⑨「ドーン！」こんなに大きくなっちゃった！すごいよ！「もどれもどれボール もどれもどれボール」
 ⑩あーよかった！おしまい

6-4 実演会を実施する

実演会場を設営するために意見交換をし、後部壁面の装飾や側面の壁面装飾を、他者の立場や考えを尊重しながら協働で作り上げる。

（図6-1、図6-2参照）



図6-1. 実演会場の設営（環境構成）



図6-2. 実演会場の設営（環境構成）

意見交換は、自己を表現し、互いを多面的に評価・発見しあう過程である。意見が他者に受け入れられることで自己肯定感を得ることができ自信にもつながる。実演会が実施された後には、各自が達成感を得る。また、観客席を作るにあたって、子どもの身体に合わせた椅子を用意し、舞台の紙芝居がよく見えるように椅子の並べ方を工夫する。並べた後で、実際に座り確認して、より良いものに修正することを繰り返して観客席を完成させる。

7. おわりに

コミュニケーション能力育成の手段として、紙芝居をメディアとした教育を検討してみた。紙芝居を制作することは、絵と言語により自分の思いを表現すること、創作表現である。実演することは声による演劇活動であり身体表現である。他者の制作した紙芝居を相互に鑑賞することは、他者の思いを互いに受け入れたり、共感することにつながる。

また、実演会場を設営するには、意見を交換し、他者の立場や考えを尊重しながら集団で協働することになる。このようなプロセスから、自己を表現し、互いを多面的に評価・発見し合うことで、自己肯定感を味わい、自信をもつようになることが期待できる。紙芝居を保育者養成課程に導入すると、その教育プロセスからコミュニケーション能力を育成することにつながると思う。

では、保育者養成課程でどのような教科に紙芝居をメディアとした教育を到達目標としてマッピングできるのだろうか。

- ①紙芝居についての歴史、紙芝居の特性に関する知識は「児童文化」
- ②紙芝居のシナリオについて、語彙、言葉による表現の基礎は「国語表現」
- ③紙芝居の絵の描き方を基礎技能として学修するのは「図画工作」
- ④実際に観客の前で実演するための知識、技術・技能は、「保育内容指導法表現」、「教職実践演習」等
- ⑤様々な、教科の中で、発表の機会に紙芝居を手作りし活用する。
- ⑥その他、既存のあらゆる教科の中で、討論、発

言、課題発表の機会を儲け、紙芝居を用いて学修したコミュニケーション能力が活かされることを学生が認識できるようにする。

紙芝居をメディアとした、コミュニケーション能力育成の方法を検討した。実際に教育し、検証を繰り返しよりよいものにしていく必要がある。また、教科担当者間の協働を図ることが、重要となるだろう。

今後の課題としては、2つ考えられる。1点目は二重のスキルギャップである。コミュニケーション能力育成の重要性の認識と紙芝居を教育メディアとして用いることの必要性の認識に関して教員間に差があるということである。もう1点は、評価(アセスメント)方法の開発が残されているということである。

【註】

1. 髯櫛久美子「教育メディアとしての紙芝居－保育者養成課程における取り組み－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.35、2013年、pp.5-24
2. 上橋菜穂子『物語ること、生きること』講談社、2013年、p.174-175
3. 一般社団法人 日本経済団体連合「2015年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」Keidanren Policy & Action 2016年2月16日、p.19
4. 厚生労働省「YES－プログラム」(若年者就職基礎能力支援事業)
5. 「大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査(平成25年度)」集計報告(単純集計)独立行政法人 日本学生支援機構が学生支援に対するニーズを把握することを目的として、全国の大学、短期大学、高等専門学校1183校を対象に、学生支援の取り組み状況について調査を行い、その結果を2014年12月に公表したものである。
6. 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」2008(平成20)年1月17日
7. 『子どもたちのコミュニケーション能力を育むために』コミュニケーション教育推進会議 審議経過報告 平成23年
8. 中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏えた今後の幼児教育の在り方について」2015(平成27)年
9. 「21世紀型スキル」ATC21st (Assessment and Teaching of 21st Century Skills) プロジェクトが提唱し、内容や評価方法について研究がすすめられている。三宅なほみ(東京大学大学院教育学研究科教授)等が参加している。
10. 「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」pp.1-5
11. 松下佳代「ディープ・アクティブラーニングの提案－〈知識 vs. 能力〉をこえるために－」日本教育学会中部地区・中部教育学会共催講座公開シンポジウム『21世紀に求められる学習とは何か』2016年6月24日記録
12. 斎藤孝『コミュニケーション力』岩波新書 2014年、p.2
13. 「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」p.6
14. 「今、大学教育に求められるジェネリック・スキル－社会に通用する力をいかに評価・育成するか－」というシンポジウムにおいて、神戸大学川嶋太津夫は「大学生のジェネリック・スキルを育成・評価するために」と題する基調講演の中で、ロンドン大学のBarnett教授の説明図式を基にジェネリック・スキルについての解説をしている。Kawaijuku Guideline 2011.11 pp.53-55
15. 岡田敬司『コミュニケーションと人間形成』ミネルヴァ書房、1998年、pp.1-2
16. 「紙芝居 ネット」名古屋柳城短期大学幼児教育研究所。http://www.kamishibai.net
17. 以下3つの研究である。
髯櫛久美子・野崎真琴「保育現場における紙芝居の活用状況」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.32、2010年、pp.65-75
髯櫛久美子・野崎真琴「保育者養成課程における紙芝居－学生のアンケート調査を通して－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.32、2010年、pp.77-86
髯櫛久美子・野崎真琴「保育者養成課程における紙芝居その2－学生のアンケート調査を通して－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.33、

2011年、pp.57-66

18. 右手和子指導・監修、名古屋柳城短期大学編集「紙芝居の上手な演じ方ー演じるための5つのポイントー」を参考にした。

How to Develop Communication Skills by Means of “*Kamishibai*” in the Course of Nursery Teacher Training

Bingushi, Kumiko*

本稿は、保育者養成課程で紙芝居を教育メディアとして活用することの意義、方法に関する一考察である。2013年の「教育メディアとしての紙芝居－保育者養成課程における取り組み－」では、保育実践に活用するための知識、技術・技能の学修について言及した。今回は、その続編として、社会に求められる資質、コミュニケーション能力育成に紙芝居を活用することの可能性を探った。

コミュニケーション能力が注目されている現状とその背景を検討し、コミュニケーション能力として求められているのはどのような能力なのかを探った。グローバル化した現代社会において、日本だけでなく世界的にも議論されており、「21世紀型スキル」、「学士力」、「社会人基礎能力」として論じられていること、さらに、専門的領域固有のコミュニケーション能力ではなく、汎用的な能力（ジェネリック・スキル）と考えられているものであることが明らかとなった。

紙芝居を保育者養成課程に導入すると、紙芝居を演じる、創作する、実演会をする等のプロセスから、自己を表現し、互いを多面的に評価・発見し合う（共感する）ことで、自己肯定感を味わい、自信をもつようになることが期待できる。つまり、紙芝居を教育メディアとした教育プロセスからコミュニケーション能力を育成することが可能であると考えられる。紙芝居をメディアとした教育を既存のカリキュラムの中に埋め込んで実施する場合、「児童文化」、「国語表現」、「図画工作」、「保育内容指導法表現」、「教職実践演習」等の教科に到達目標としてマッピングすることが可能との結論を得た。その場合、教員の協働に関し二重のスキルギャップの問題があること、評価（アセスメント）方法を開発することが、課題として残されている。

キーワード: 紙芝居, コミュニケーション能力, ジェネリック・スキル, 「コミュニケーション推進会議」

